

フランス語の間投詞
—分類の問題とディスクールにおける働き—

山本大地（福岡大学）

本発表ではまず、一般に指摘される間投詞の音韻的、形態的、統語的特徴を確認したうえで、間投詞の意味分類とディスクールにおける働きという二点を詳しく検討する。

間投詞は意味的に不均質だが、いくつかの類に分けることができ、これまでに様々な研究者が分類を提案している。その方針や名称等、違いを見せる部分もあるが、ある程度共通している部分もある。とりわけ、A 感情・感覚を表出する類と B 聞き手に対して働きかける類の区別は、概ね共通してみられる分類である。この二類は、対照性を見せる一方で、両方の働きをもつもの、B から A へと移行したものが存在することから、両者の間には何らかの点において通じる側面があることを指摘する。

次に、フランス語学でしばしば指摘されるディスクールにおける間投詞の働きに注目する。Świątkowska (2000, 2006) はダイクシスの観点から、Kleiber (2016/2017) はアスペクトの観点から、そして Rosier (2006) と Drescher (2004) は話法（引用）の観点から、間投詞がディスクールの連続性を中断する、もしくは新たなディスクールを導入する側面に言及している。

こうした指摘を受け、本発表では①発話における間投詞の位置、②起動相的な意味特性、そして、③引用された発話における間投詞の使用を中心に観察を行う。取り上げるのは、aïe 「いたっ」および一連の悪態語(putain, zut, merde, bon sang, bordel)である。いまのところ明確な結論に至っていないが、間投詞にみられるディスクールの連続性の中断、新たなディスクールの導入といった働きは、間投詞の語彙特性に加え、生起する環境も作用するのではないかという見通しを立てている。

以上で述べたことは、フランス語に特有のことではなく、概ね英語やスペイン語、日本語でも観察できる現象であり、様々な知識をおもちの参加者の皆様と語り合える談話会になればと思う。

要旨で言及した文献

Drescher, M. (2004), “Jurons et hétérogénéité énonciative”, *Travaux de linguistique* 49-2, 19-37.

Kleiber, G. (2016/2017), “Du cri de douleur au signe de douleur : l’interjection Aïe !”, *Synergies Pays Scandinaves* 11/12, 113-133.

Rosier, L. (2006), “De la vive voix à l’écriture vive. L’interjection et les nouveaux modes d’organisation textuels”, *Langages* 161, 112-126.

Świątkowska, M. (2000), *Entre dire et faire de l’interjection*, Cracovie, Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellońskiego.

Świątkowska, M. (2006), “L’interjection : entre deixis et anaphore”, *Langages* 161-1, 47-56.